

動衛研つくば・愛知県中央家保

〔動物〕豚，LWD，5日齢。

〔臨床症状〕2018年2月に愛知県内の母豚200頭規模の一貫農場で5日齢の新生豚1腹の衰弱及び起立不能が散見されたため，病性鑑定を実施した。提出例は病性鑑定のため安楽殺された1頭である。農場の分娩舎は清潔に保たれており，当該子豚への抗生物質投与はなかった。また，里子を実施していた。

〔剖検所見〕舌尖部は暗赤色変し，断面には多発性，びまん性に白色病巣が認められた。肺においても多発性白色病巣が認められ，病巣周囲は充うっ血により赤変していた。肝臓と脾臓では，漿膜面に数個の白色病巣が認められたが，実質には著変は認められなかった。

〔組織所見〕舌と肺においてグラム陰性桿菌及び多数の燕麦様細胞を伴う多発性巣状壊死がみられ，病変部周囲には好中球，マクロファージ及び線維素が浸潤していた。一部は血管中心性に病変が形成されていた。同様の病変は肝臓と脾臓の漿膜，心臓，中枢神経系でも認められた。また，舌表層では潰瘍が観察された。抗 *Actinobacillus suis* 抗体を用いた免疫染色ではグラム陰性桿菌に一致して，舌と肺で多数，その他の臓器で中等度～少数の陽性反応が確認された。

〔診断〕多発性，重度，グラム陰性桿菌及び燕麦様細胞を伴う壊死性舌炎（新生豚における多発性壊死性舌炎を伴う *A. suis* 感染症／豚アクチノバチルス症）

〔考察〕*A. suis* は，豚の軟口蓋の扁桃及び気管上部に常在する通性嫌気性，非運動性のグラム陰性桿菌であり，衛生状態の良好な農場において，離乳，分娩，輸送などのストレスが加わると胸腔及び腹腔内の諸臓器や，皮膚，中枢神経系において炎症を引き起こす。本症例の舌と肺のパラフィン切片及び肺の分離菌からPCR増幅した16S rRNA遺伝子の塩基配列は，*A. suis* の配列と同一であり，分離菌の生化学的性状も *A. suis* と一致したことから豚アクチノバチルス症と診断された。本症例は *A. suis* による舌炎の初の症例である。舌炎は外的要因や扁桃，肺などから波及した可能性があり，血行性，腹膜及び脳脊髄液を介して全身に移行したと考えられた。発症要因として，里子によるストレスや初乳免疫が不十分であった可能性が考えられた。（杉江建之介・芝原友幸）

〔参考文献〕

1) Sugie, K. et al. 2019. J. Vet. Med. Sci. 81, 274-278.